



週刊穀物



世界の穀物情報がここに凝縮されています。
毎週水曜日夕方発行

穀物価格横ばい中

発行日 : 2012/12/26



25日はクリスマスで市場は休日。

24日月曜日のシカゴコーン3月限は、2.25セント高の704.25セント。米国産トウモロコシへの需要が回復するとの期待や安値拾いの買いのため続伸。先週、輸出・国内双方の需要低下のため7月上旬以来の安値を付けた。先週は2.3%下落。月初来では5.9%安となっている。市場が注視する穀物調査会社インフォーマ・エコノミクスの予想で、来年の米トウモロコシ作付面積見通しが1936年以来最大の水準に上方修正されたことも重し。ANZ銀行のシンガポールのストラテジストは、「米国はトウモロコシの輸出市場で競争力がなかったが、1ブッシュル=7ドル前後からはまた競争力が出てくる」と述べた。クリスマスイブによる早引けのため、出来高は薄かった。

24日のシカゴ大豆3月限は6.50セント（0.5%）高の1435.75セント。2012年12月25日 06:46クリスマスの休場を前に出来高が薄い中、先週に1カ月ぶり安値に下げたことを受けた安値拾いやテクニカルな買いで続伸した。3月きりは6.50セント（0.5%）高の1435.75セントで引けた。中国需要低下の兆候が大豆市場への重しとなっている。中国勢は来年年明けに南米から安い供給があることを期待し、米国からの荷をキャンセルしている。ANZ銀行のシンガポールのストラテジストは、「中国バイヤーのカーゴキャンセルのニュースで動揺し売られ過ぎた水準からの反発が少しあった」と語った。24日の取引はクリスマスイブのため通常より2時間早く終了した。米農務省は週間輸出検証高の発表を26日に延期した。

米商品先物取引委員会（CFTC）が21日発表した18日までの1週間の取組高によると、大手投機筋の大豆の買い越しは9万3168枚に増加した。（ロイター時事ES）

24日のシカゴ小麦3月限は1.75セント高の793.75セント。シカゴ小麦は小幅続伸。需給面では特に大きな材料もなく、クリスマス前で商いの薄い中でポジション整理の買い戻しが先行する展開となった。3月限は夜間取引で買いが先行、早朝に796セント台まで値を伸ばす場面も見られたものの、8ドルの節目に届くことなく息切れ。通常取引開始後は先週金曜の終値近辺まで値を下げての推移が続いたが、引け間際には改めて買いが入りプラス圏で取引を終了した。需給面では特に大きな材料も見当たらない中、クリスマスを前にポジション整理の買い戻しが優勢の展開となった。目先は年明けまで参加者も戻らず、薄商いの中でほとんど動きがないか、まとまったオーダーが入り上下どちらの方向にでも大きく値が振れてしまう不安定な展開かの、どちらかとなりそうだ。トレードを仕掛ける環境としてが必ずしも良いとは言えず、様子見に徹しているのが正解だろう。中長期的にはやや回復の兆しが見えてきた輸出が順調に伸びてくることを前提に、流れが強気に変わる可能性が高いと予想するが、いずれにしても次に動くのは年明け以降としたいところだ。（先物情報ネットワーク）



TOPICS 米国の Feed Grain (飼料用穀物) by USDA

米国における飼料用穀物とは、トウモロコシ、モロコシ (Sorghum)、大麦 (Barley)、及びオート麦 (Oats) であるが、トウモロコシが9割以上を占めている。主としてHeartland (イリノイ、アイオワ、インディアナ、サウスダコタやノースダコタの東部、ネブラスカ、西ケンタッキー、オハイオおよび、ミズーリ州の3分の2を指す) の8000万エーカー以上の耕地でトウモロコシは栽培されている。これらの飼料用穀物は、家畜の餌のエネルギー源となっている。

トウモロコシはまた、多角的な食料用途に利用され、コーンスターチや甘味料、トウモロコシ油などの野菜油や工業用アルコールとしても使われエタノールの原料でもある。米国産トウモロコシの約2割は輸出されて世界のトウモロコシ供給源となっている。

アイオワ州とイリノイ州が二大トウモロコシ産地であり、3分の1強を生産している。

1996年制定の農業改良法の規定により、米国のトウモロコシ作付面積は、1983年の6020万エーカーから増加させることとなった。この法律により、農家は翌年の穀物生産を自らの意思で生産することが可能になった。飼料用穀物生産農家の数は最近減少傾向にあるが、その中でトウモロコシ農家だけは増加している。さらに大規模なトウモロコシ生産農家 (500エーカー以上) が毎年増加しており、小規模農家の減少と対照的である。

トウモロコシの生産は品種改良技術や肥料、防虫剤効果の向上、機械化、灌漑設備、耕地の転回技術、防虫駆除技術の進歩などによって、少ない面積で多くの収穫を得るようになり、毎年単収が増加している。

エタノール生産の急増によって、トウモロコシ価格は急騰し、コーン作付に対するインセンティブが高まった。多くの場合、トウモロコシは大豆との間で選択され、トウモロコシを増やした。そのため大豆畑が減少した。また、以前は牧草地だった土地がトウモロコシ畑に変わり、綿花などからの転換もConservation Reserve Program (保全留保プログラム) が失効して以来トウモロコシの転換が進んだ。

トウモロコシは、食料、飼料、工業用途に用いられている。飼料の主要原料である。飼料需要は牛・豚・鶏などの家畜頭数に比例している。また飼料需要は穀物の供給や価格にも敏感に反映する。代替飼料材料の量や価格にも影響を受ける。

エタノール生産は、増加しており、副産物も増加している。乾燥製法とウェット製法のどちらにおいても、エタノール生産に際しては副産物が生成され、代表的な副産物はDDGと呼ばれる蒸留可溶性乾燥穀物 (Distillers Dried Grain with Solubles) である。これは、家畜用の飼料として使われる。

56ポンドブッシュェルのトウモロコシで乾燥製法でエタノールを生産すると、17.4ポンドのDDGSが生産される。米国ではDDGSは牛の餌にもなるが、大半は豚と鶏の餌となる。

トウモロコシは、人間の食料や他の工業用品にもなっている。食品用、種子用、工業用 (FSI) 用途はトウモロコシの国内需要の3分の1を占める。トウモロコシは、その用途によって乾燥製法とWet製法が使い分けられる。

Wet製法では、トウモロコシは高果糖シロップ (HFCS) ブドウ糖、デキストロース、スターチ、コーン油、野菜アルコール、工業用アルコール、燃料用エタノールになる。

乾燥製法では、コーンフレークや、シリアル、トウモロコシ粉、粗挽きトウモロコシ、コーンミール、ビール生産用の原料などになる。

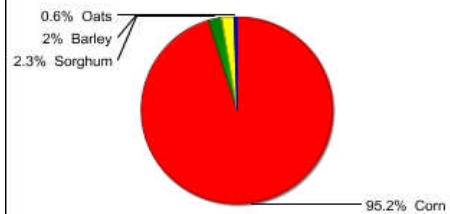
最近ではトウモロコシ原料の食品市場がラテンアメリカ系人口の増加により米国内で拡大している。将来、人口増に応じてこの市場は拡大していくと期待されている。

農民は、政府によって収入を保証する制度を受けている。生産変動支払契約や、

市場開拓融資、災害援助、土地保全資金、穀物保険などである。政府のプログラムは、高果糖シロップや燃料用アルコール市場にも及んでいる。砂糖に関する輸入費用、関税、数量割当は高果糖シロップ生産を経済的に保護している。最近の環境法では、燃料用アルコール生産を多くするための工程が示されている。

トウモロコシは、世界の飼料用穀物取引の主要品目であり、過去10年間その3分の2を占めてきた。米国は世界最大のトウモロコシ生産国で、世界の約5分の1の年産量を誇っている。

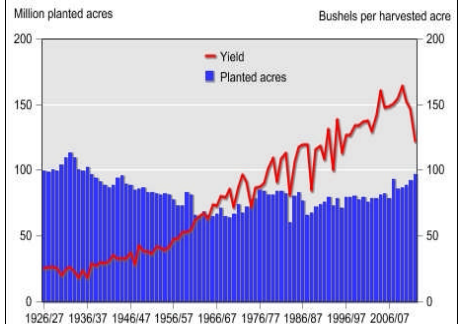
U.S. feed grain production, 2012/13 2012/13年度の米国飼料用穀物



Source: USDA, World Agricultural Outlook Board, World Agricultural Supply and Demand Estimates. Updated: December 2012.



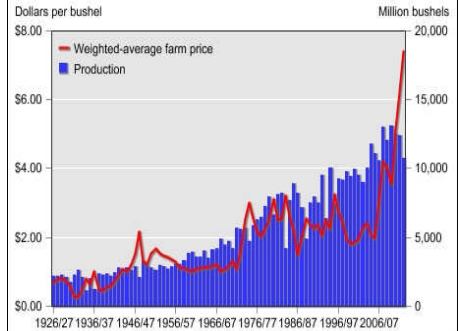
U.S. corn acreage and yield 米国作付面積と単収



Source: USDA, World Agricultural Outlook Board, World Agricultural Supply and Demand Estimates. Updated: December 2012.



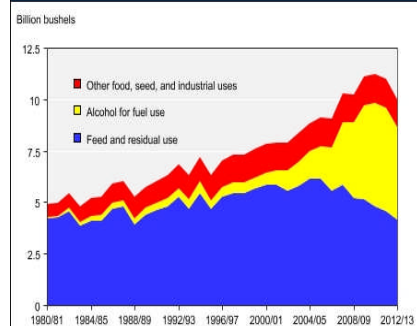
U.S. corn price received by farms and production 米国農家受取価格と生産量



Source: USDA, World Agricultural Outlook Board, World Agricultural Supply and Demand Estimates. Updated: December 2012.



U.S. domestic corn use 国内消費 (US\$)



Source: Calculated by USDA, Economic Research Service. Updated: December 2012.





TOPICS 世界のトウモロコシ取引 by USDA

トウモロコシ、ソルガム、大麦、オーツ麦、ライ麦で構成される飼料用穀物の中では、トウモロコシが一番大きな取引を世界で行われており、最近では4分の3を占めている。トウモロコシの貿易は大部分が飼料用であり、工業・食品用はわずかである。加工されたトウモロコシや副産物、たとえば、コーンミール、トウモロコシ粉、甘味料、グルテン食品なども取引されているがこの項では取り上げない。

TOPICS 米国のトウモロコシ輸出

米国のトウモロコシ輸出は世界最大である。また、トウモロコシ輸出は米国の農産物貿易収支にとっても重要な地位を占め米国経済に貢献している。ポップコーンやスイートコーンを除くトウモロコシ穀物は1990年代、米国農産物輸出量の約11%を占めていた。2008年にその輸出量は最大を記録し、そのシェアは12%になった。

世界のトウモロコシ貿易に占める米国のシェアは平均60%で、1970年代は約1300万トンであったが、1979/80年には6200万トンに増加した。ロシアや日本、欧州の需要増と新興諸国の需要増によるものであった。その後1985/86年には世界的な不況とEUの拡大、国内価格に対する補助などがあり、輸出は3100万トンまで減少した。

1980年代後半には、米国のトウモロコシ輸出量は回復し、生産が増加したことと、政府が穀物融資率を引き下げたことにより1989/90年には6000万トンに戻った。1990年代初めにはソ連の崩壊や中国からのトウモロコシ輸出の増加により、再び減少した。

バイオ燃料の生産が始まったことにより、米国のトウモロコシや飼料用穀物の生産に拍車がかかり、輸出や飼料用、そのほか国内需要も増加した。米国は2007/08年に需要と生産の記録を作り、輸出は6100万トンとなった。しかし、近い将来は世界経済の悪化や需要減が輸出を減少させている。にもかかわらず、世界の人口は増加し、食肉製品は引き続き拡大すると思われる、長期的には穀物輸出は増加傾向にあると思われる。

TOPICS 世界のトウモロコシ貿易

米国はトウモロコシ生産では大きなシェアを持つが、貿易という面では比較的少ない。米国は世界の需要の15%をまかなっているに過ぎない。トウモロコシの国際価格は主として米国内の需給によって決まっており、その他の国は米国価格に従っている。アルゼンチンは世界第二位のトウモロコシ生産国であるが、南半球に属しているため、アルゼンチンの農家は、米国のトウモロコシの供給量が決まってから作付を始める。米国の生産量が少ない場合はいち早く供給量を増やすことができる。ブラジルやウクライナ、ルーマニアや南アフリカは生産が多かったり、国際価格が高い場合は主なトウモロコシ供給国となる。

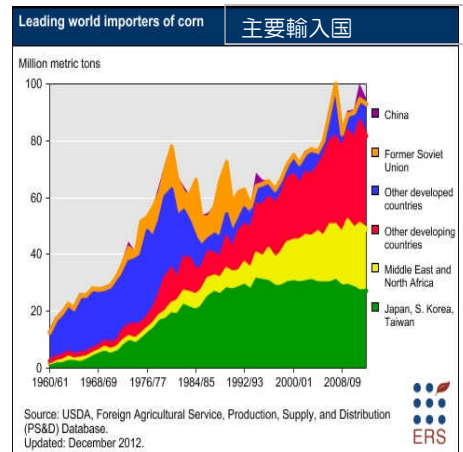
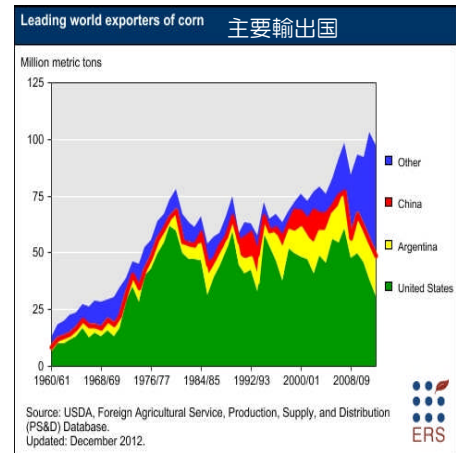
中国は、トウモロコシ貿易にとっては重要ではあるが、不確定な供給国である。数年世界第二位の輸出国であったり、大量の輸入国になったりする。中国のトウモロコシ輸出は政府の輸出規制や輸出税、その還付等の要

中国国内トウモロコシ価格は、世界市場価格より通常高めに設定されており、大量な在庫を保持するコストが膨大になっている。そのため、輸出量は、国内生産量とは関係無く変動し、中国の輸出量を予測することを難しくしている。

世界のトウモロコシ貿易は1980/81年に最大となった。これはソ連邦と欧州が大量に輸入したためである。それ以来欧州の一般農業政策によって、またEU加盟国が増加したこともあり、トウモロコシ輸入が制限されたため、欧州諸国の輸入量は減少傾向に転じた。たとえば、ハンガリーがEUに加盟したことにより、それまで世界に輸出されていた同国のトウモロコシは域内で流通するようになった。1980年代末ソ連邦は政治経済的に再構築されたため、家畜群が清算され、旧ソ連邦や東欧諸国の飼料輸入が減少した。同時期に日本や韓国や台湾が食肉需要が増大してトウモロコシ輸入を増加させた。

1980年以降発展途上国は、世界的にトウモロコシ輸入量を増加させている。1999/2000年度以降、新興諸国のトウモロコシ輸入量は増大し、年間7000万トン以上になった。

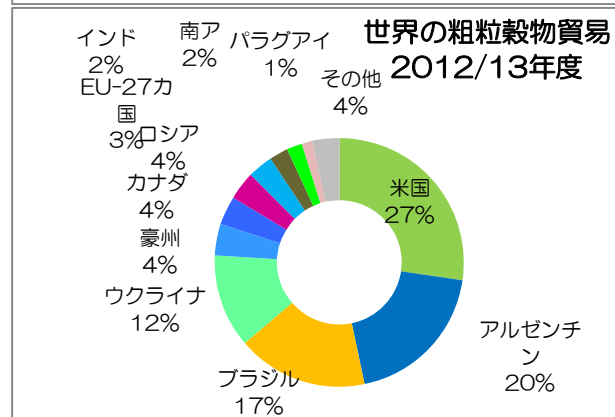
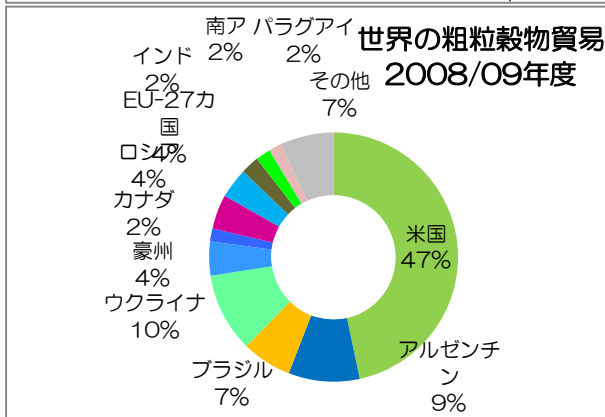
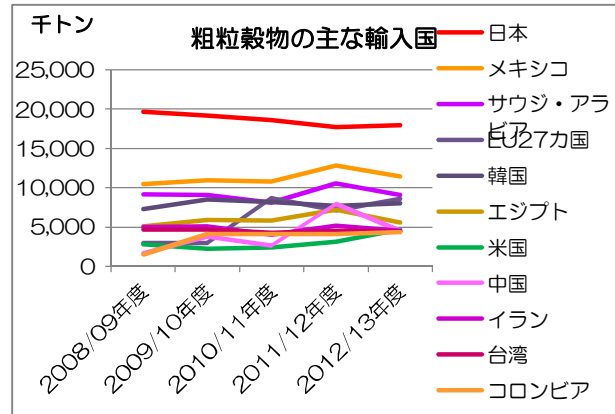
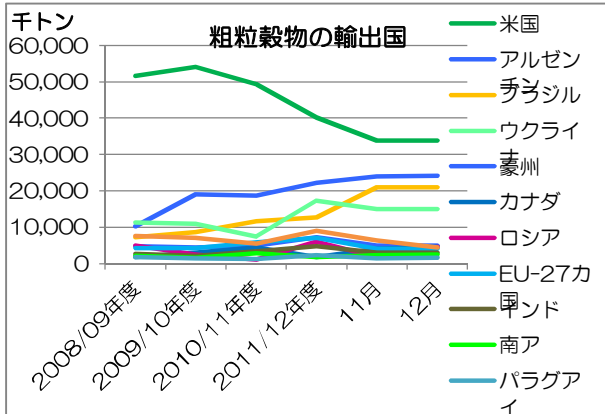
日本は世界最大のトウモロコシ輸入国である。同国は祖龍穀物の生産がほとんどないが非常に大きな食肉生産を行っている。そのため、高品質のトウモロコシの継続的な輸入国になっている。近年飼料用需要は少し頭打ち傾向になっているが、コーンスターチ等の工業用需要は増加している。韓国は二番目に大きな輸入国で、価格に敏感なハイヤーであり、安い国から購入したり、小麦や他の飼料原料に変えることがある。メキシコはトウモロコシの生産国であるが、輸入も増えている。ホワイトコーンは食品用に、イエローコーンやソルガムを食肉用飼料用に、輸入している。





海外の需要は、輸入国の飼料原料需要のみならず、価格を調整したり競合商品を輸入する等の国内政策にも依存している。粗粒穀物は飼料用としてしばしばお互いに補完し合う。トウモロコシは他の粗粒穀物や小麦、キャッサバ等の非穀物飼料原料とも競合する。油糧種子粕や他のタンパク源はしばしば穀物の代替品として使われる。また、こうしたタンパク源や特に低タンパク源の代替物として利用される。

米国からの輸出は減少しており、アルゼンチンやブラジル、ウクライナからの輸出が増加している。08/09年度の米国の輸出シェアは47%であったが、12/13年度は27%に落ちている。輸入国は日本が一位で、メキシコ、サウジアラビア、EUとなる。



今後の予想

2012年の穀物価格は、シカゴトウモロコシが8月10日に849セントの史上最高値を付け、シカゴ大豆が9月4日に1789セントの史上最高値をつけたが、その後下落して、値上がり前の水準まで戻っている。50年ぶりの干ばつに見舞われた米国の生産が減少したためであるが、秋口には生産量が修正されるなど、毎月のUSDAによる需給報告が緩和傾向の内容であったため価格は下落した。しかし、依然として、過去50年で二番目に低い在庫量であることに変わりはなく、収穫が終わった現在では供給は確定している。幸い米国産トウモロコシの輸出引き合いが低迷しているため、価格は高騰していないが、これは南米で今年穫れた物がまだブラジルからオファーされており、高値の米国産を回避しているためと思われるが、もうそろそろ南米産も品薄になる頃である。一方大豆は昨年の1.5倍近くの輸出成約があるにもかかわらず、米国農務省の需要は控えめに見られている。来年8月までの需要であるとはいえ、今後徐々に実態を正確に反映する数字となれば、大豆の期末在庫率は過去最低可能性がある。

掲載される情報は株式会社コモディティ インテリジェンス（以下「COMMI」という）が信頼できると判断した情報源をもとにCOMMIが作成・表示したのですが、その内容及び情報の正確性、完全性、適時性について、COMMIは保証を行なっており、また、いかなる責任を持つものでもありません。

本資料に記載された内容は、資料作成時点において作成されたものであり、予告なく変更する場合があります。

本文およびデータ等の著作権を含む知的所有権はCOMMIに帰属し、事前にCOMMIへの書面による承諾を得ることなく本資料およびその複製物に修正・加工することは強く禁じられています。また、本資料およびその複製物を送信、複製および配布・譲渡することは強く禁じられています。

COMMIが提供する投資情報は、あくまで情報提供を目的としたものであり、投資その他の行動を勧誘するものではありません。

本資料に掲載される株式、債券、為替および商品等金融商品は、企業の活動内容、経済政策や世界情勢などの影響により、その価値を増大または減少することもあり、価値を失う場合があります。

本資料は、投資された資金がその価値を維持または増大を補償するものではなく、本資料に基づいて投資を行った結果、お客様に何らかの障害が発生した場合でも、COMMIは、理由のいかんを問わず、責任を負いません。

発行元：



株式会社コモディティ インテリジェンス
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1丁目11-3-310
会社電話： 03-3667-6130 会社ファックス 03-3667-3692